



祝嶺 正献

日本武藝躰道三代宗家

ご挨拶

列島の南から徐々に梅雨明けが発表され夏もこれからがいよいよ本番となりますが、先の豪雨災害で被害に遭われた被災地域の方々には、この場をお借りし、心よりお見舞いを申し上げます。

コロナ禍で中止を余儀なくされた躰道の各種全国大会ですが、漸く二年ぶりに新天地、長野県立武道館の会場をお借りし、第42回全国少年少女躰道優勝大会、並びに、第39回全国高校生躰道優勝大会の開催が現実のものとなりました。不遇な一年半の間、選手の日常を支えて頂いた関係者の皆様、大会実行委員会の皆様に心より感謝申し上げます。

未知のウィルス感染症と共に生きるニューノーマル、巣ごもり、テレワーク需要の環境下から、これまでとは違った躰道との関わり方が築かれたことと思います。本大会に限らず大勢の集まるイベントや学校行事も規模の縮小や延期、中止といった措置が取られ、コロナ禍で布かれた行動規制は不安や困惑が人々を硬直、後ずさりさせ、安心と期待が人々を前に進めることを教えてくれました。

AIとの共存で私たちの行動はより健康的、規則的であることが期待され、ロボットや機械のパフォーマンスはより人間らしくなることが求められています。科学と技術が人をピンポイントで目標へたどり着くよう手立てを示してはくれますが、最後の瞬間まで思い通りの自分を出し切ることが出来るか否かは「人」の力によるものです。躰道が持続可能な環境保全への取り組みに適った性格を既にもつものであることを踏まえ、これからの「自」と「他」、「自分」と「社会」、「人」と「自然環境」を巡るエネルギーについて改めて考えてみたいと思います。リモートで伝えられるスクリーン上のコンテンツがあるのになぜ生の空間を共有する大会会場が尊いのか？を。

最後になりましたが、少年少女、高校生選手の皆さんが思い通りの自分を出し切ることで達成感が得られますよう、また、二年ぶりに新鮮な気持ちで全国大会にご挨拶させて頂く機に恵まれたことへの感謝と共に、大会の無事成功をお祈り致します。

令和3年8月